

原始仏教における善悪

——『法句』第183偈の意味するもの——

片 山 一 良

(駒 澤 大 学)

I いわゆる「七仏通誡偈」について

われわれ人間は、なぜ苦しみ、悩むのか。仏はその問いより、苦の果としての自己(苦)を知られ、苦の因である渴愛(集)を断たれた。同時に、苦の滅尽という楽の果として涅槃(滅)を証され、苦の滅尽にいたる行道という楽の因である聖八支道(道)を修された。そのような因果の覚者である仏が、智慧によって苦を解決し、慈悲をもって説かれた教えを一般に「仏教」と呼ぶ。それは四聖諦を中心とする教えである。われわれはこれを「原始仏教」とも称する。

仏はまた、われわれが苦しむ生死(輪廻)のプロセスを、その逆のプロセスとともに、縁起、すなわち十二縁起によって示された。それはいわゆる惑・業・苦の三道にまとめられるものであり、苦の根本的な因たる煩惱(惑)、その煩惱に基づく行為(業)、その行為の果(苦)による説明をいう。悪とはその貪・瞋・痴という煩惱に基づく行為をさしている。善のない不善である。苦の直接的な因であり、悪しき業(意思)に他ならない。善とはそれに対する、悪のない善き業をさす。また善にいたる行為、修習でもある。したがって、「善悪」とはわれわれの表裏にある「業の善と悪」について言われるものである。

以下は、そのような原始仏教の善悪について、とくに原始經典の一である小部『法句』(*Dhammapada*)の最もよく知られた「第183偈」の意味するものを、伝統のパーリ諸註釈により若干考察しようとするものである。あわせて、いわゆる「七仏通誡偈」を理解するための一資料を提供したいと思う。

さて、本稿に扱われる偈がまず、その「七仏通誡偈」と呼ばれる三偈(『法句』183-185偈)の一であることを確認しておきたい。三偈とはつぎの通りである。⁽²⁾

いかなる悪も行なわず	sabbapāpassa akaraṇaṃ
もっぱら善を完成し	kusalassa upasampadā
自己の心を淨くする	sacittapariyodapanam
これが諸仏の教えなり	etaṃ Buddhāna sāsanaṃ. (<i>Dhp.</i> 183)

耐え忍ぶは最上の修行	khanti paramaṃ tapo titikkhā,
涅槃は最上、と諸仏は説く	nibbānaṃ paramaṃ vadanti Buddhā,
他を害するは出家にあらず	na hi pabbajito parūpaghāti
他を悩ますは沙門にあらず	samaṇo hoti paraṃ viheṭṭhayanto.

(*Dhp.* 184)

罵り害することもなく	anuvādo anupaghāto
パーティモッカをよく守り	pātimokkhe ca saṃvaro
食事において量を知り	mattaññutā ca bhattasmiṃ
遠く離れて臥し坐り	pantaṃ ca sayanāsaṇaṃ
また禅定によく励む	adhicitte ca āyogo
これが諸仏の教えなり	etaṃ Buddhāna sāsanaṃ. (<i>Dhp.</i> 185)

つぎに、これらの偈がいかなる因縁由来によって唱えられたかを見ることにしよう。それについて『法句註』(DhpA. III. 236)は、つぎのように伝えている。

「この法は、仏がジェータ林(祇園精舎)に住んでおられたとき、アーナンダ(阿難)長老の問いについて説かれたものである。伝えによれば、長老は昼間道場に坐り、考えた。〈仏は過去七仏の母父・寿命・菩提樹・弟子集団・最上弟子・侍者のすべてについて語られた。しかし布薩については語っておられない。はたしてかれらの布薩と今の布薩は同じなのか、異なるのか〉と。そこで仏にこれをお尋ねすると、仏はこう言われた。「過去の仏たちには期間の区分のみがあり、話の区分はありませんでした。なぜなら、ヴィバッシー仏(毘婆尸)は七年毎に、シキー仏(尸棄)とヴェッサブー仏(毘舍浮)は六年毎に、カクサンダ仏(拘留孫)とコーナーガマナ仏(拘那含牟尼)は一年毎に、カッサパ仏(迦葉)は六カ月毎に布薩を行ない、一日教誡を与えるだけで、それぞれの期間が充分であったからです。そのため、過去仏の布薩には期間だけが告げられたのです」と。そしてすべてに共通するただ一つの布薩を示し、これらの偈を唱えられた。この説示の終わりに多くの者が預流果を得た」と。

これからその三偈が過去七仏のすべてによって弟子たちに教誡として唱えられたものであることがわかる。つまりパーリの伝統によれば、その諸経典にいわゆる「七仏通誡偈」という術語は見られないものの、これらが内容として、したがって本稿で扱われる「第183偈」も、確かに七仏による通誡の意味をもつ偈であることが認められる⁽³⁾。

II 法句第183偈の註釈の意味

さて、以上三偈のうち、その中心的な教誡内容をもち、また我が国でも仏教の教えとして最もよく親しまれている言葉である「第183偈」のパーリ語原文を、再びここに示せば、つぎの通りである。

sabbapāpassa akaraṇaṃ (1)

kusalassa upasampadā (2)

sacittapariyodapanam (3)

etaṃ Buddhāna sāsanaṃ. (4)

その意味は以下の通りであり、自己の意思を尊重した「自発的内容」からなっている。

いかなる悪も行なわず (1)

もっぱら善を完成し (2)

自己の心を浄くする (3)

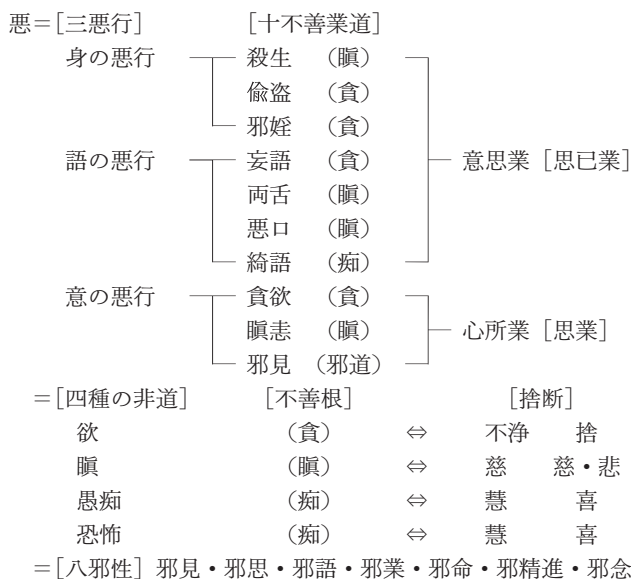
これが諸仏の教えなり (4)

なおまた、我が国によく知られたその漢訳がある。つぎの通りであるが、全体として、「命令的内容」になっていることに注意されてよい。⁽⁴⁾

「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教」⁽⁵⁾

このように、本偈は一見したところ簡単な言葉からなっているため、ごく一般的にやさしく説明されたり、また様々な観点から自由に理解されてきたと言ってよい。古来種々に解釈されうる偈でもあるが、伝統的理解はどのようなものであるのか。これより、伝統のパーリ語資料に基づき、四句(1)－(4)からなる本偈の意味を、各句毎に多少とも明らかにした⁽⁶⁾い。ただし、いずれの場合も最初に各句のキーワードを掲げた後、註釈を示すことにする。

(1) 「いかなる悪も行わず」(sabbapāpassa akaraṇam)…初善性=戒



まず「いかなる悪も」(sabbapāpassa)とは、あらゆる不善(akusala)(*NetA.* 107), あらゆる不善業(akusala-kamma)(*DhpA.* III. 237)も、《十二不善心すべての生起を含む非難されるべき法も》(*DAṬ.* II. 98)ということである。それは三悪行(tī-duccarita), すなわち, 身の悪行, 語の悪行, 意の悪行である。それらは十不善業道(akusala-kammaṇipatha), すなわち, 殺生(pāṇātipāta)・偷盜(adinnādāna)・邪淫(kāmesu-micchā-cāra), 妄語(musā-vāda)・兩舌(pisuna-vācā)・惡口(pharusa-vācā)・綺語(samphappalāpa), 貪欲(abhijjhā)・瞋恚(byāpāda)・邪見(micchā-ditṭhi)である。それらは二の業, すなわち意思(cetanā)と心所(cetasika)である。そのうち, 殺生と兩舌と惡口は瞋(dosa)によって, 偷盜と邪淫と妄語は貪(lobha)によって, 綺語は痴(moha)

によって生起する。これら七の根拠は意思業 (cetanā-kamma) [ただし一般には思已業 (cetaṇika-kamma)] である (Net. 43)。貪欲 (abhijjhā) は不善根 (akusala-mūla) としての貪である。瞋恚 (byāpāda) は不善根としての瞋である。邪見 (micchā-diṭṭhi) は邪道 (micchā-magga) である。これら三の根拠は心所業 (cetasika-kamma) [ただし一般には思業 (cetanā-kamma)] である (Net. 43)。それゆえ「意思と心所である」と言われた。

このように悪は、悪行、不善業道、業によって分類されるが、さらにつぎのように不善根により非道に行くことから分類される (NetA. 107)。すなわち、不善根が努力に到れば《貪・瞋・痴の不善が身・語の努力に到れば、身・語の努力を生起させれば》(NetA. 107)、欲 (chanda) によって、瞋によって、恐怖 (bhaya) によって、愚痴によって、四種の非道 (agati)⁽⁸⁾ に行く。そのうち、欲によって非道に行くものは貪によって生起し、瞋によって非道に行くものは瞋によって生起し、恐怖によって、また、愚痴によって非道に行くものは痴によって生起する。以上のように「いかなる悪も行なわず」という場合の「悪」は説明される。

さて、「いかなる悪も行なわず」とは、つぎのように三の善根によって三の不善根を捨断し、いかなる悪も行なわぬこと、起こさぬことである (NetA. 107)。すなわち、貪は不浄 (asubha) によって、瞋は慈 (mettā) によって、痴は慧 (pañña) によって捨断される。同様に貪は捨 (upekkhā) によって、瞋は慈と悲 (karuṇā) によって、痴は喜 (muditā) によって、捨断 (pahāna)、滅没に到る。以上は梵住 (brahma-vihāra) によるものである。そのうち、不快 (arati) を静める喜はその根本となる痴を捨断するということで、「痴は喜によって捨断」云々と言われている (NetA. 108)。それゆえ、世尊は「いかなる悪も行なわず」《行なわず》とは、起こ

さず (anuppāda)》(DAṬ. II. 98) と言われた。

さらにまた、他の根拠によって、同類・異類の法の転換により、悪を行なわないことを示すならば、つぎのように述べられる (NetA. 108)。すなわち、「いかなる悪も」(sabba-pāpa) とは、八の邪性 (micchatta), すなわち、邪見 (micchā-diṭṭhi), 邪思 (micchā-saṅkappa), 邪語 (micchā-vācā), 邪業 (micchā-kammanta), 邪命 (micchā-ājīva), 邪精進 (micchā-vāyāma), 邪念 (micchā-sati) 《無常などについて「常である」と随念・思念などによって起こる不善の転起》(NetV. 164), 邪定 (micchā-samādhi) である。これが「いかなる悪も」と言われる。これら八の邪性を作らぬこと、行なわぬこと、犯さぬこと、つまり邪性を起こさぬこと (NetA. 107) が「いかなる悪も行なわず」と言われる。

また、「いかなる悪も行なわず」とは、戒による教え (sāsana) の初善性 (ādikalyāṇatā) を示すものである。それは教えの初め (ādi) であり、無後悔 (avippaṭisāra) などの徳をもたらしものゆえに (Vism. 4)。

(2) 「もっぱら善を完成し」(kusalassa upasampadā) …中善性=定

善⁽⁹⁾=[四地の善] 聖道法と三地善法

[八正性] 正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定

八の邪性が捨断されるとき、八の正性 (sammatta) 《正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定という八の正性》が《異類の転換の法によって》(NetV. 164) 生起する。八の正性を作ること、行なうこと、起こすことが「善を完成し」と言われる。「善」(kusala) とは「四地の善」(catubhūmaka-kusala) 《聖道 (四聖道) の法と、それらの資糧になる三地の善法》(DAṬ. II. 98) である。「完成し」(upasampadā) とは「獲得」

(paṭilābha) ということであり (NetA. 107; DA. II. 479), 出家 (決意) 以降, 阿羅漢道 (arahatta-magga) に到るまで善を起こすこと, および起こすための修習 (bhāvanā) をいう (DhpA. III. 237)。

また, 「もっぱら善を完成し」とは, 定による中善性 (majjhe kalyāṇatā) を示すものである。それは教えの中間に (majjhe) あり, 様々な神通 (iddhividha) などの徳をもたらすものゆえに (Vism. 4-5)。

(3) 「自己の心を淨くする」 (sacittapariyodapanam) …後善性=慧

心の淨化 = 古の道 (聖道) の修習作用 = 五蘊の淨化
二種の淨化 = ①止観による蓋の捨断 ②聖道による随眠の根絶
二種の淨化地 = ①見の地 ②修の地
淨化の意味 「苦 (五蘊) を洞察によって淨化する」
「集 (渴愛の汚れ) から淨化する」
「道 (聖道支) によって淨化する」
「滅 (無為界の法) が淨化される」

「自己の心を淨くする」とは, 過去の聖道 (ariyamagga) の修習作用 (bhāvanā-kiriya) を示すものである。《これはヴィパッシー世尊・正自覺者のパーティモッカ (波羅提木叉) 誦唱 (pātimokkhuḍḍesa) の偈であるゆえに》 (NetA. 108) 「古の道 (purāṇa-magga), 古の徑 (purāṇa-añjasa) とは聖八支道 (ariya-aṭṭhaṅgika-magga) の同義語である」 (S. II. 106) と言われるヴィパッシー仏によって証得された古昔の道である。その自己の心の淨化 (attano citta-vodāna) をいう。五蓋 (欲貪, 怒り, 沈鬱・眠気, 浮つき・後悔, 疑) から自己を淨めることであり (DhpA. III. 237), 自己の心が輝くこと (citta-jotana) である (DA. III. 479)。ただし, それは《最上道をそなえた心はすべてにわたり淨められ, 最上果の刹那にも淨められており》 (DAT. II. 98), 《もはや淨化され得ない頂点に達した淨化が意趣されているか

ら》(NetT. 69), 阿羅漢果 (arahatta) によって生じるものであり (NetA. 107), 増上戒学などを完成させ, 阿羅漢果の清浄によって極度に清まるものである (ItivA. II. 133)。心は阿羅漢果によって浄められねばならない。心が浄められるとき, 五蘊は浄められたものとなる。

その浄化 (pariyodapana) には二種, すなわち蓋の捨断 (nīvaraṇa-pahāna) と潜在煩惱 (随眠) の根絶 (anusaya-samugghāta) がある。《止観 (samatha-vipassanā) によって蓋の捨断 (nīvaraṇa-pahāna) があり, また聖道の修習 (ariyamagga-bhāvanā) によって随眠の根絶 (anusaya-samugghāta) がある。このように浄化には二種があり, 五蘊 (pañcakkhandha) は浄化されたもの (pariyodāpita) となる, という意味である。なぜなら, 蓋と随眠が捨断されている人々は浄心を起こす容色者となるゆえに》(NetV. 165)。では, その浄化にどれほどの地 (段階) があるのかと問われるならば, 二の浄化地 (pariyodapana-bhūmi) があると言わねばならない。すなわち⁽¹⁰⁾見の地 (dassana-bhūmi) と⁽¹¹⁾修の地 (bhāvanā-bhūmi) である。

さて, 《ここで, 「いかなる悪も行なわず」云々の偈に説かれている諸法において, 何が苦諦であるのか, 何が集諦であるのか, 何が道諦であるのか, 何が滅諦であるのか」と問われるべきであるが》(NetV. 165), 偈に説かれている諸法のうち, 何を洞察によって浄化する (pariyodapeti) のか。苦 (dukkha) 《すなわち, 苦諦 (dukkha-sacca)》《五蘊》を浄化するのである。何かから浄化するのか。集 (samudaya) 《すなわち, 集諦 (samudaya-sacca)》《渴愛の汚れ (taṇhā-saṅkilesa)》から《五蘊》を浄化するのである。何によって浄化するのか。道 (magga) 《すなわち, 道諦 (magga-sacca)》《聖道支 (ariyamaggaṅga)》によって浄化するのである。何が浄化されるのか。滅 (nirodha) 《すなわち, 滅諦 (nirodha-sacca)》《無為界の法 (asaṅkhata-dhātu-dhamma)》が《無為界 (asaṅkhata-dhātu) を証得している人によって》

(*NetV*. 165) 浄化されるのである。⁽¹³⁾これについては、たとえ無為界がいかなる汚れによって汚れなくても、証得している人についてこのように言われているのである。なぜなら彼の汚れが消えない限り、無為界は浄められていない、と言われるゆえに。涅槃の証得によって諸蘊は浄められるべきであり、それら蘊の残りのある状態、また残りのない状態によって、それぞれ「有余依（涅槃）」、また「無余依（涅槃）」と言われるが、そのようにこれは理解されねばならない(*NetA*. 108)。これらが⁽¹³⁾四聖諦である。

なおまた、「自己の心を淨くする」とは、慧による後善性 (*pariyosāna-kalyāṇatā*) を示すものである。それは教えの終わり (*pariyosāna*) であり、もろもろの好・不好に対して、その如き（一如の）状態をもたらすものゆえに (*Vism.* 4-5)。

(4) 「これが諸仏の教えなり」 (*etaṃ Buddhāna sāsanaṃ*)

…「七仏通誡偈」／三学／四諦（八正道）

諸仏 = 一切諸仏
教え = 教示・教誡

「これが諸仏の教えなり」とは、これが一切諸仏 (*sabba-Buddha*) の教誡 (*anusiṭṭhi* ; R°. *anusatthi*) であり (*DhpA*. III. 237), 教示 (*ovāda*) である (*DA*. II. 479), ということである。そして諸仏の教誡「七仏通誡偈」としてのこの教えは、大略つぎのような意味をもつ。

「戒の防護 (*sīla-samvara*) により、あらゆる悪 (*pāpa*) を《彼分によって》捨断し、

止観 (*samatha-vipassanā*) により、《世間・出世間の》善 (*kusala*) を完成し、

阿羅漢果 (arahatta-phala) により、心 (citta) を浄めるべきである、

これが諸仏の教え (sāsana) であり、教示 (ovāda)、教誡 (anusitṭhi) である」

(DA. II. 479; DAT. II. 98; B^o. NetA. 107) と。

またこの教えは、パーリ聖典と註釈文献の中間に位置する紀元前後のマハーカッチャーナによる『指導論』(Netti) によれば「四諦」(四聖諦)・「八正道」(聖八支道) を、五世紀のブッダゴースアによる『清浄道論』(Visuddhimagga) によれば、戒・定・慧の「三学」を包摂する。

なお、この本偈を含む三偈(第183-185偈)に示された「教え」は、一切諸仏の「教示パーティモッカ」(ovāda-pātimokkha) と呼ばれたものである。それらは、長寿の諸仏には教えの終りまで誦唱が続き、寿命のわずかな諸仏には第一菩提の間のみ誦唱され、学処が制定された後は「命令パーティモッカ」⁽¹⁴⁾ (āṇa-pātimokkha) のみが、誦唱された。しかも、それは比丘たちだけが誦唱するのであり、諸仏が誦唱することはない。それゆえ、われわれの世尊(釈尊)も、第一菩提の二十年間だけ、この教示パーティモッカを誦唱されたのである。ある日、東園のミガーラマター殿堂に坐られ、比丘たちに告げて言われた。

「比丘たちよ、今後、私は布薩を行ない、パーティモッカを誦唱しません。比丘たちよ、今後、そなたたちだけで布薩を行ない、パーティモッカを誦唱すべきです。比丘たちよ、如来が不浄な会衆のために布薩を行ない、パーティモッカを誦唱するであろう、という道理(因)はなく、機会(縁)はありません」

と。それ以来、比丘たちは命令パーティモッカを誦唱しているのである。この命令パーティモッカは(世尊が)かれらのために誦唱されなかったも

のであり、それゆえ、「誦唱されぬパーティモッカ」(anuddiṭṭha-pāti-mokkha)と言われている(*Sp.* I. 186-187, Cf. *VinST.* I. 445, *VinVT.* I. 93)。これは、『律藏』「第一波羅夷」の因縁(*Vin.* III. 8)におけるヴィパッシー仏・シキー仏・ヴェッサブー仏なる三仏の梵行が久住しなかった事柄について、述べられたものである。

『法句』第183偈を含む三偈は、いわゆる「七仏通誡偈」として、以上のような意味と背景をもって今日に伝えられてきたものである。

III 原始仏教における善惡の意味

原始仏教における善惡とは何かということについて、すでに第一節で簡略に述べた。また第二節では、『法句』第183偈に関する諸註釈より、かなり細部にまで触れえたとと思われる。今ここでは、それをさらに補うべく、仏教の善惡に言及する場合に避けることのできない「四正勤」(catu-sammappadhāna)、すなわち精進、努力ということについて述べておきたい。かつて仏は中部七十七『大サクルダーイ經』⁽¹⁶⁾においてつぎのように説かれた。

「また、ウダーイーよ、私は弟子たちに行道を説いており、わが弟子たちはその通りに行道し、四正勤を修習します。ウダーイーよ、ここに比丘は、(1)未だ生じていないもろもろの悪しき不善の法が生じないように、意欲を起こし、精進し、努力し、心を励まし、勤めます。(2)既に生じているもろもろの悪しき不善の法が断たれるように、意欲を起こし、精進し、努力し、心を励まし、勤めます。(3)未だ生じていないもろもろの善の法が生じるように、意欲を起こし、精進し、努力し、心を励まし、勤めます。(4)既に生じているもろもろの善の法がとどまるように、失われないように、増大するように、広

大となるように、発展するように、円満するように、意欲を起こし、精進し、努力し、心を励まし、勤めます。そこでまた、わが多くの弟子たちは通智 (abhiñña) の終結と完成を得て住みます」

(*Mahāsakuludāyī-sutta*, M. II. 11)

と。ここで仏は四正勤を説かれたが、これによって何が語られたのか。『相応部』「迦葉相応」(S. II. 196-197) の法門によれば、弟子のために前分の行道が語られたのである。なぜなら、つぎのようにサーリプッタがマハーカッサパに語っているからである。

「友よ、ここに比丘は(1)『私に、未だ生じていない悪しき不善の諸法が生じれば、不利になるであろう』と、熱心に行ないます。(2)『私に、既に生じている悪しき不善の諸法が捨断されなければ、不利になるであろう』と、熱心に行ないます。(3)『私に、未だ生じていない善き諸法が生じなければ、不利になるであろう』と、熱心に行ないます。(4)『私に、既に生じている善き諸法が消滅すれば、不利になるであろう』と、熱心に行ないます」

と。これについて註釈(MA. III. 243-244)は、つぎのように説明している。すなわち、〈このうち、「悪しき不善の」とは、貪(lobha)などである。「未だ生じていない善き諸法」とは、止・観(samatha-vipassanā)と道(magga)とである、と解されねばならない。「すでに生じている善き諸法」とは、止・観のみである。ただし、道は一度生じれば、消滅しても不利になることは全くない。なぜなら、それは果に縁を与えるだけで消滅する《道は、今にも未来にも必ず利益をもたらすものである》(B°. MAT. 116)からである。あるいはまた、先の場合《「私に、未だ生じていない善き諸法が生じなければ、不利になるであろう」という(3)の場合》(B°. MAT. 116)も、止・観のみが解されるべきである、とされている〉と。

この一つの経と註釈からまた、悪不善とは何か、善とは何かが明らかである。悪とは貪・瞋・痴ないしそれより起こる業である。善とは無貪・無瞋・無痴にいたる業であり、また止観、道である。これが原始仏教の善悪に関する基本的な理解と言ってよいであろう。

注

- (1) これが涅槃をさす場合、厳密には「果」と呼ぶことはできない。
- (2) *Dhammapada*, vv. 183-185.
- (3) 以上の三偈に関する因縁、ならびに解釈については、拙稿「法句&随聞記(十五)」(『傘松』平成11年3月号, 67-69頁, 大本山永平寺刊) 参照。
- (4) この意味については『正法眼蔵』「諸悪莫作」参照。
- (5) 「法句経」大正蔵4, 467b。
- (6) 本稿において使用したパーリの主な参考資料はつぎの通り(ただし, B^o以外の資料は PTS 版)である。なお, 以下の説明は主として『指導論』およびその註釈, 復註釈に従う。

D. (= *Dīghanikāya*) II. 49 (*Mahāpadāna-sutta*); *DA.* (= *Dīghanikāya-aṭṭhakathā*) II. 479; *DAṬ.* (= *Dīghanikāya-aṭṭhakathā-ṭīkā*) II. 98-99; *Net.* (= *Netti*) 43-44; B^o. *NetA.* (= *Netti-aṭṭhakathā*) 107-108; B^o. *NetṬ.* (= *Netti-ṭīkā*) 69; B^o. *NetV.* (= *Netti-vibhāvinī*) 162-165; *Peṭakopadesa* 54; *DhpA.* (= *Dhammapada-aṭṭhakathā*) III. 236-238; *ItivA.* 133-134; *UdA.* 298; (*Vin.* III. 8); *Sp.* (= *Vinaya-aṭṭhakathā*) I. 186-187; B^o. *VinSṬ.* (= *Sāratthadīpanī-ṭīkā*) I. 443-445; B^o. *VinVṬ.* (= *Vimativinodanī-ṭīkā*) I. 92-93; *Vism.* (= *Visuddhimagga*) 5.

なお, 本稿に関連する参考資料として次を参照されたい。水野弘元『法句経の研究』(春秋社) 160頁, 平川彰『平川彰著作集第二巻』(春秋社) 267頁以下, 中村元『中村元選集第十五巻』(春秋社) 2頁以下, 真野龍海「初期仏教の倫理思想」『仏教の倫理思想とその展開』所収(大蔵出版) 45頁以下, 浪花宣明『サーラサンガハの研究—仏教教理の精要—』(平楽寺書店) 250頁以下。

- (7) 貪根(8心)[喜俱悪見相応・無行・有行/不相応・無行・有行, 捨俱悪見相応・無行・有行/不相応・無行・有行], 瞋根(2心)[憂俱瞋恚相応・無行・有行], 痴根(2心)[捨俱疑相応/掉挙相応]の十二をいう。

- (8) 「四種の非道」については、つぎのように説明される。「いかなる四に理由によって（人）は悪業（pāpa-kamma）を行なうのか。欲〈愛情〉（pema）によって非道を行く者は、悪業〈行なうべきでないこと〉を行なう。瞋によって非道を行く者は、悪業を行なう。痴によって非道を行く者は、悪業を行なう。恐怖によって非道を行く者は、悪業を行なう。資産家よ、聖なる弟子は、欲によって非道に行くことがない。瞋によって非道に行くことがない。痴によって非道に行くことがない。恐怖によって非道に行くことがない。それゆえ、これら四の理由によって悪業を行なうことがないのである」（*D. III. 182 = D. no. 31, Sīṅgālovāda-sutta ; DA. III. 944*）。
- (9) 「善（kusala）とは、悪しき（kucchita）諸法を弱めること（sāna）から、智（ñāṇa）が“ku-sa”と呼ばれ、その智（kusa）によって行なわれるべきもの（刈り取られるべきもの：lātabba）であるから、善（kusa-la）である」（*kusalān ti kucchitānaṃ pāpadhammānaṃ sātato tanukaraṇato ñāṇaṃ ku-saṃ nāma, tena kusena lātabbaṃ pavattetabban ti kusa-laṃ, Sad. 433*）。Cf. *DA. II. 522 ; DAṬ. II. 223*。「善（kusala）は非難すべき（kucchita）悪法を動かし（*salayanti*），砕くから善である」（*VvA. 169*）。その他種々の解釈が知られる。佐々木現順『阿毘達磨思想研究』（清水弘文堂）19頁以下参照。
- また、「善」あるいは「功德」を意味する語に“puñña”がある。その語義についてはつぎが知られる。「善（puñña）とは、自己の所作を浄める（pavati）から puñña である。ただし、*kiyādiggaṇa*（動詞第五類√*kī*+*nā*）を得て（pavati < √*pū* が転じて）、浄める（punāti）から puñña であると言われねばならない」（*puññaṃ ti ettha pana attano kārakam pavati sodheti ti puññaṃ, kiyādiggaṇaṃ pana patvā punāti ti puññaṃ ti vattabbaṃ, Sad. 402-403*）。
- (11) 一般にいう見道（四諦観察の段階・見諦道・預流向），あるいはまた〈初道（預流道）慧（paṭhamamagga-paṇṇā）の見地（dassana-bhūmi）〉（*Vism. 439*）と解される。
- (12) 一般にいう修道（見道後の段階），あるいはまた〈残り三道（一來・不還・阿羅漢の道）慧（avasesa-maggattaya-paṇṇā）の修地（bhāvanā-bhūmi）〉（*Vism. 439*）と解される。
- (13) 〈第一義的には一切の諦には受（苦）者，作（煩惱）者，行（道）者は存しないゆえに，（四諦は）空である〉（*Vism. 512-513*）。なお〈「苦」「滅」は果のゆえに同類（sabhāga），「有為」「無為」のゆえに異類（visabhāga）

である。「集」「道」は因のゆえに同類、一向の「不善」「善」のゆえに異類である〉(Vism. 516)。

- (14) *Netti(-pakaraṇa)*。この成立年代については確定されない。Ñāṇamoli: *The Guide* (PTS), p. xiii; 水野弘元『パーリ論書研究(水野弘元著作集第三卷)』(春秋社) 140頁以下参照。
- (15) 〈「尊者方よ、僧団は私の言うことを聞いてほしい」(suṇātu me bhante saṅgho, Vin. I. 102) などの仕方で述べられたものが「命令パーティモッカ」である〉(*Kaṅkhāvitaraṇī*, p. 10)。拙稿「伝統仏教の比丘戒律一序篇一」(『駒沢大学仏教学部論集』第25号392頁) 参照。
- (16) 拙訳『パーリ仏典・中部・中分五十経篇II』第77経第11節(大蔵出版) 参照。